

プリスクリプティブ・アプローチ（処方的研究）について

東京工業大学 藤井 聡

筆者が人間の行動を対象とした研究を始めたおり、いわゆる行動科学は「記述的（descriptive）行動研究」と「規範的（normative）行動研究」の二つに分けられるものと漠然と認識していた。

ここに、記述的行動研究とは“人々の行動は、どのようになっているのか？”という問いに答えるための研究であり、心理学的行動研究がその例として挙げられる。

一方、規範的行動研究とは、“人々の行動は、どのようにあるべきなのか？”という問いに答えるための研究であり、“合理性”の概念を軸としつつ、主として数学を援用しながら議論を重ねる経済学的行動研究がその例として挙げられる。

しかしその後、これら以外に「処方的（prescriptive）行動研究」なる研究アプローチがあるということを知った。処方的行動研究は“人々の行動があるべき姿に近づくために、いかにすべきなのか？”という問いを考える研究であり、主として「工学」の分野にて取り扱われていた。

当時、筆者は行動研究の王道はやはり「記述」と「規範」であり、処方的研究はどちらかといえば「おまけ」の様なものではないかと漠然と理解していた。なぜなら、処方的行動研究では、記述的行動研究が目指す「人間行動についての深い理解」も、規範的行動研究が目指す「行動に関わる矛盾無き論理体系の構築」も達成できないものであり、それ故に、どちらかと言えば退屈な研究に思えたからである。

ところが、ここ最近、哲学の人達を交えながら処方的行動研究について議論する機会に何度か恵まれたのだが、その議論を通じて、筆者の処方的行動研究に対する認識が、180度異なったものとなった。

その議論の中で、ある哲学者が次のように発言した。「世界がどのようになっているのかを考えるものが哲学である。ただし、その問題に、いかに生きるべきかという問題を重ね合わせて考えると、哲学の最大の特徴がある。それはなぜかと問われても、答えようがない。哲学とはその様なものとして生まれ、そして、引き継がれてきたものなのである」。

筆者はこの説明を聞いた時に多大なる衝撃を受けた。哲学とは、とどのつまり「いかに生きるべきか」を考えるものだったのである。無論、100人の哲学者がいれば100通りの哲

学の定義があるのだろう。しかしよく良く考えてみれば、確かに、最も正統なる哲学の系譜の中で、「いかに生きるべきか」という問いが中心に据えられていたことはどうやら間違いないさそうに思えるのである。

いかに生きるべきか——。この問いは、「記述的」な問いでも、「規範的」な問いでもない。それは、紛う事なき「処方的」な問いである。つまりは、哲学の伝統は、「記述」でも「規範」でも無く、「処方」にあったのである。

ただし、「いかに生きるべきか」を考えるためには、人間とはいかなるものなのかという「記述的」な問いに答えなければならない。さらには、目標としての理想の生き方とは何かという「規範的」な問いにも答えなければならない。そうした記述的な問いと規範的な問いの両者を深く理解した時に初めて、いかに「生きるべきか」という処方的問いに答える準備が整うのである。

筆者はこの様に理解して以来、行動科学研究における処方的研究の重要性を改めて強く感じるようになった。処方的研究の立場をとることではじめて、人間の行動を深く、かつ、多面的に捉えることができるのではないかと思えるようになったのである。

確かに、一面において、我々の行動は数式で表現できる。しかし、鳥や虫の声を聞きながら、数式では表現し得ぬえも言えぬ幸せな気分に入る時もある。その一方で、全く感情にまかせて行動しているようでも、結局は特定の数式に従っているかのように行動していることもある。人間がそうした合理的なのか非合理的なのかよく分からない両義的な存在である以上、単一の視点のみで行動科学を進めることは、極めて「非科学的」なアプローチなのであろう。記述的に「生身の人間」を理解しつつ、規範的な「良き生き方」の実現を目指す——。そうした処方的行動研究を重ねたときにはじめて、人間存在に関する全的な理解が、少しずつ深められていくように思えるのである。

追記：この度、本記事を書かせていただくこととなりましたのは、林知己夫賞（優秀賞）を頂戴したことが直接の契機でありました。この度の機会を与えて頂いた学会の皆様、ならびに、受賞研究の協同研究者の早稲田大学・竹村和久教授に深謝の意を表したいと思えます。ありがとうございました。